

Phraseology に注目した多義語の辞書記述を目指して

— shade を例とした一考察 —

Phraseological treatment of polysemous words in dictionaries:
a case study of *shade*

大塚みさ

日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

意味単位を単語より長く設定すれば、必然的に「多義語」の定義や解釈が変わってくる。本稿でははじめに phraseology に注目して多義語の分析を行い、語の出現パターン、すなわち周囲との関連性を検証する。その結果を EFL 辞典における記述と照合することにより、辞典という限られた環境下で意味を扱う可能性を追究する。

Summary：

Applying a longer unit of meaning inevitably affects the definition and interpretation of ‘polysemous words’. In this paper, a polysemous word is analysed with a corpus in terms of phraseology, and the pattern of its dependency on its environment is examined. The result is compared with the treatment of the word in some EFL dictionaries, with the aim of exploring the possibilities of a dictionary in which the environment of words is always limited.

キーワード：多義（語）・意味単位・コロケーション・辞書記述

Key words：Polysemy, Units of Meaning, Collocation, Phraseology, Definition of dictionary

1. はじめに

複数の指示対象や用法を持つ語は、一般に多義語と呼ばれる。これは種々の要因によって引き起こされる現象であるため、結果的にさまざまな種類の多義語が発生することになる。「多義語」という術語は、言語を単語単位でとらえた場合に限定された視点によるものであるが、その枠組みには収めがたいケースもしばしばあり、逆に単語単位で正確に記述できるケースが稀であるといっても過言ではない。

意味の単位に関しては、Sinclair (2004)¹に端的に示されている。以下はその冒頭部分である。

The starting point of this chapter is the observation that words enter into meaningful relations with other words around them, and yet all our current descriptions marginalize this massive contribution to meaning (p.25、傍線筆者) .

そしてその結論では、以下のように述べられ、もはや単語に意味の単位を求めない方針が示されている。

[...] the units of meaning to be much more extensive and varies than is seen in a single word (p.39)

筆者は、これまで日本語の多義語、多義現象の実際がいかに正確に分析できるか、またそれを限られた条件下にある辞典がいかに記述できるかという問題の追究を行っており、その一環として、上の Sinclair に代表される英国のコーパス言語学に基づく辞書編纂法とその基盤にある言語理論を参照して、日本語研究へ応用する可能性を探究してきた。

本稿では、多義語を「単語が実際の文脈において、周囲の語句と結びついて、さまざまな意味の実現に寄与する現象」と定義した上で、その一例をコーパスを用いて分析する。また、その結果を英語学習者用辞典における扱いと比較することにより、辞典における意味記述の可能性を追究する。

2. 意味単位再考 —idiom principle²と open choice principle—

意味の単位認定の問題は、多義性の研究に大きくかかわる。その理由の一つは、単語よりも長い単位を適用することによって、単語ベースの曖昧性はほとんど解消される (Sinclair 2004: 137, 139 *passim*) ためである。

Sinclair (1991, 2004) は、意味は単語が単独で有するものではなく、他の要素との相互作用によって生じるものであるという点を繰り返し主張している。したがって、単語は意味記述の最良の原点とは言えず (2004: 148)、意味の単位は大部分がそれ以上の長さのものである (*ibid*: 30) と結論づけられる。

こうした主張は、彼の提唱する「現実の言語使用における意味理解に必要なモデル」(Sinclair 1991: 109) である open-choice principle と idiom principle に見ることができる。前者は「言語をとらえ、記述する普通の方法」であり、「しばしば‘slot-and filler-model’と呼ばれる」(*ibid*)。個々のスロットには実質どんな語でもあてはまるという点で単語の選択は自由に行われ、唯一文法的に正しいか否かという制約が加わる。

一方の idiom principle は「単一の選択 (single choice) を構成する、ある程度前もって組み立てられた言い回し (semi-preconstructed phrases) を多数含む」(*ibid*) を指す。Sinclair (1991:110) は言語の意味を説明するには open-choice principle は不適切であり、idiom principle を採用すべきで

¹ 2章 The search for units of meanings (*Tectus*, 9,1 1996 に初出。)

² idiom という術語は多義的であり、しばしば混乱を招く (Moon 1998: 2-5)。idiom principle における idiom とはいわゆる成句ではなく、「慣用的使用」というレベルのものを指す。これを「慣用原則」と訳する方法もある (南出 2003 等)、ここでは原語表記のままとする。

あると主張する。これに従えば、結果的に従来の多義の解釈に少なからず影響が及ぶことになる。たとえば、上記と並行して Sinclair が指摘する脱語彙化現象 (delexicalization)³ は、基本語の多義性のとらえ方を大きく変えるものである。

Barnbrook (2007:187) は、使用頻度の高い語があまり明確ではなく、独立的でない意味を表す傾向に触れ、それと idiom principle との間に重要な関連があると考ええる。そして、辞典における idiom principle すなわち依存的な意味 (dependent meaning) のとらえ方について議論している。

こうした手法を phraseology に注目したアプローチと呼ぶことがある。この術語も多義的であり、日本語訳も定まらないため、以下では便宜的に原語のまま示すことにする。

以上の点に注目して、次のセクションでは、コーパスを用いて多義語の使用例を phraseology の観点から分析することを試みる。

3. コーパス分析結果

長い単位でとらえることの有効性を理論的に確認することができたところで、次の段階として、実際に語が用いられる場面を分析してみよう。

以下、出現パターンに比較的バラエティのある名詞 *shade* について Bank of English⁴ を用いて考察する。サブコーパスはイギリス英語の書きことばデータ⁵ に限定し、無作為抽出した 200 例を対象に分析する。

はじめに、*shade* について得られた 200 件のデータを、その出現パターン別に分類して示す。名詞という性格柄、そのほとんどは形容詞または前置詞に先行される例である。着眼点によって複数の分類が可能であるが、まずは語と語の組み合わせを中心に分類した上で、それぞれの内部を詳細に見ていくことにする。分類結果を便宜的に高頻度順に並べ、出現件数が 10 例(全体の 5% 以上) のパターンに限定して以下に示す。

A (59/200) 形容詞 + *shade(s)*

warm shade (温かな色調)、*darker shade* (暗い色合い)

pastel and luminous shades (パステル調の明るい色合い)

A' (7/200) 数詞 + *shades*

available in three shades (3 色発売中)

with 28,000 shades to choose from (28,000 色から選べる)

³ *do, take, make* 等の高頻度語はそれ自体ほとんど意味を持たず、周囲の意味から意味が決まってくるというもの。

⁴ Harper Collins と the University of Birmingham との合弁事業によるコーパス。2008 年の段階で 450 million words を含む。

⁵ 使用したサブコーパスは以下の通りである。用例と共に示す略称等とともに以下のとおり示す。

全国紙 Times	(Times)	全国紙	(News)
地方紙	(RNews)	大衆紙 Sun	(Sun)
雑誌	(Mags)	書籍	(Books)

B (46/200) (in) + (形容詞) *shade(s) of* + 名詞

a new shade of black (黒系の新色)

an electric shade of scarlet (あざやかな深紅色)

soft, light shade of powder blush (やわらかで明るい)

C (24/200) 前置詞 (in/into/under/within) + (the) + *shade*

sitting in the shade of peepul tree (インド菩提樹の木陰に座って)

plants which will survive in medium shade (半日陰で育つ植物)

C' (8/200) *put/leave/stick sth/sb in the shade*

the unknown players who are putting the superstars in the shade

(スーパースターをしのぐ無名選手)

D (10/200) *a shade*

they are just a shade tired (ちょっと疲れている)

a shade too difficult (少々難しすぎる)

パターン A および B における *shade* は、いずれも「色調」「色合い」にかかわるという点で共通している。

パターン B の構造にはバラエティがあり、() 内に示した要素の有無によってさらに何通りかの可能性がある。A を B に包括できそうであるが、両者に共起する形容詞に違いが見られるため、ここでは別に扱う。

A における形容詞には、典型的、基本的な色彩語 (*green, brown, orange*) は少ない。代わりに、「何かの色」を表す語 (*hazel, marmalade, sherbet*) や、本来色彩とはかかわらないが、*shade* と結合してその色調の度合いを表す語 (*warm, dry, hot* 等) が目立つ。そのほか、光沢やつやを示す語 (*aluminium, metallic, sparkling, polish* 等) も見られる。

一方、パターン B においては色彩に直接かかわる形容詞が *of* 以下に現れる。明度や様子をあらわす *varying, muted* 等が目立ち、より複雑な色合いや色調を示しているということが言える。*shade* はそれらの前要素との結合により、*of* 以降の色彩語の詳細を示しているといえそうである。

A、B 両パターンに共通する形容詞は、色の度合いまたは他の色との異同を示す以下の 5 語のみである。

different, neutral, pale(r), similar, varying

このことから、A、B 両パターンにおける *shade* の役割には若干の相違が認められる。したがって、それぞれにおいて *shade* の意味特定に影響を与えるところまでを含めて一つのまとまりととらえるのが適切だと考えられる。言い換えれば、これらは *phraseology* に基づいて解釈されるべき言語表現である。

同じく、色調に関して用いられる「数詞+*shade*」というパターンを A に準ずるものと位置づ

けた。その用例のほとんどは化粧品の微妙な色合いに関する雑誌記事である。日本語ではその助数詞に「～色」が用いられる。

パターン C (前置詞 (*in/ into/under/within*) + (*the*) + *shade*) における *shade* はすべて単数形である。冠詞を伴わない例 (*in deep shade, in shade*) も見られるが、パターン C 全体の約 70% が定冠詞 *the* に後続しており、全体の半数が *in the shade (of)* というパターンで現れる。in 以外の前置詞 (*into, through, under, within*) はそれぞれ一例ずつ出現する。句全体でいわゆる日陰や物陰を表す例のほか、以下のような比喩的な使用も見られる。

- (1) Permanently in the *shade* as a result, the house was run-down and "ugly", she says (Times).
- (2) Ray Parlour's superb effort ended up in the *shade* (Times).

これが、動詞と結びついてやや固定化したと思われるパターン、'put/leave/stick sth/sb in the *shade*' を、C' として別に扱った。

- (3) The unknown players who are putting the superstars in the *shade* [...] (Times).
- (4) Alex mcleish is uncomfortable being stuck in the *shade* (Times).

パターン D (*a shade*) は全体で「少し」「ちょっと」のように副詞的に用いられる。

- (5) Decemo told them, a *shade* too emphatically (Book).

これは、(6) の *all shade of* ～と意味的な関連があるだろう。

- (6) [A]ll *shades* of opinion within a borough finds a voice in the council chamber (Mags).

最後に、出現頻度が 5% 以下のパターンの中についても見ておこう。*shade* の複数形がややインフォーマルな文体で用いられてサングラスを指す場合がある。これらは比較的決まったパターンで出現する。

- ・サングラスを連想させる語とのコロケーション

(*shades and long hair; jeans and shades, police shades*)

- ・特定の動詞句とのコロケーション (*take off his shades, pull off her shades*)

'*shades and* ～' (*shades and long hair*)、'～ (and) *shades*' (*jeans and shades, police shades*) のようにサングラスを連想させる語と共に用いられ、*take off, pull off* 等の動詞句表現とのコロケーションで用いられ、これがこの語義のヒントとなる。

このほかにも主としてアメリカ英語で用いられる日よけやランプシェードとしての用法がわずかに見られるが、ここでは割愛する。

以上、*shade* については「陰」という一見独立的な語義も、それが用いられる文脈や種々の出現パターンに支えられたものであることが考察された。これにより単語が単独に意味を有するのではなく、その出現パターン、すなわちその周囲の数語との関連をもって意味が認識できる点を

改めて確認することができたと思われる。次のセクションにおいて、こうした周囲の情報に依存した意味 (dependent meaning) が、辞典でどのように扱われ、記述されているのかをみていくことにしよう。

4. 学習者用英英辞典における扱い

先に触れた Barnbrook (2007) は Sinclair (1991:116)⁶ で言及された *back* をとりあげて、いくつかの辞典における扱いを比較している。初めに母語話者向け辞典である *Merriam-Webster Online Dictionary* の文脈よりも品詞分類を優先した語義区分や句的な意味の扱いに触れて、依存的意味よりも独立的意味 (dependent meaning) に優位性が置かれていると指摘する。

このような定義や語義記述の改善に取り組んできたのが、Sinclair の指揮のもとで進められた Cobuild プロジェクトである。Barnbrook は、その完全文による定義 (full sentence definition) が実際の言語使用における語の意味に不可欠な文脈情報を豊富に与えていることを、*Collins COBUILD English Dictionary of Advanced Learners* (CCED) の例と共に示している。そしてそこでの句的用法の扱い、依存的意味の頻度を反映した語義の扱いを組織的手法 (organizational approach) と呼び、その他の例として *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (CALD) をあげている。CALD においては、語義別に見出し語が分割され、リスト表示される。その一つ一つに、その語のその意味が用いられる文脈情報が GUIDEWORD と呼ばれるキーワードで付与され、ユーザーが求める語義との弁別に機能している。

shade noun (SLIGHT DARKNESS)

shade noun (DEGREE)

shade verb (STOP LIGHT)

shade verb (CHANGE)

Barnbrook (*ibid*: 191)はこのアプローチによって、「語形自体は独立的な性格をもつものの、意味はその語の用いられる文脈に大いに依存する」ことを認識させられると述べた上で、このような「idiom principle を適用したアプローチ」が、特に近年の英語非母語話者向け辞典 (以下「EFL 辞典」) に見られることに触れ、その重要性を強調している。

日本語においては同様の水準をもつ辞典は存在しないが、各 EFL 辞典におけるアプローチの詳細をみることによってその可能性を追究することは大変有意義であると考えられる。そこで、前セクションでとりあげた名詞 *shade* の扱いを、以下の EFL 辞典を用いて考察する。

Oxford Advanced Learner's Dictionary of English 8th edition (OALD)

Longman Dictionary of Contemporary English 5th edition (LDOCE)

Cambridge Advanced Learner's Dictionary 3rd edition (CALD)

⁶ Chapter 8, 'Collocation'. 初出は Steele, R. and Threadgold, T. (eds.) 1987 *Language Topics: Essays in Honour of Michael Halliday*, II. である。

Collins COBUILD English Dictionary of Advanced Learners (CCED)

Macmillan English Dictionary for Advanced Learners 2nd edition (MED)

ここで特に注目したい点は、語義のまとめ方や語義区分の方法、固定的な句の扱い、およびコロケーション等の情報の提示法である。ただし、個々の辞典の特徴を比較するというよりも、むしろ辞典という限られた環境下での可能性を追究したい。

先にみたように、*shade* は出現パターンと意味との結びつきが比較的強い傾向にある。そこで、前セクションでの *shade* のパターン別分類と辞典での語義区分を比較してみよう。

出現頻度の高い色彩・色調に関する用法については、個々の出現パターンのバラエティに着目して、以下の2つに分類した。

ADJ *shade(s)*(in) (ADJ) *shade(s)* of N

これらについては、5つの辞典すべてが一語義にまとめているが、個々の出現パターンのバリエーションはどのように扱われているだろうか。

CCED は完全文定義の中で、(1)不定冠詞を伴うこと、(2) *shade + of + 色彩語* というパターンを取ることを明示している。

‘in’ N) A shade of a particular colour is one of its different forms. For example, emerald green and olive green are shade of green.

そのほか、コロケーションとして提示する方法 (LDOCE)、用例中の一部を太字にして示す方法 (CALD)、用例中で、形容詞が先行する点を太字で強調する方法 (OALD) が見られる。

[+of] *a bright shade of pink* (LDOCE)[...] an unusual shade *of* yellow/an unusual yellow shade (CALD)*a delicate/pale/rich/soft shade of blue**Cool pastel shades are just right for summer.* (OALD)

A に準ずる A' として分類した数詞に後続するパターンは、色彩語をこそ伴わないが、色彩・色調のバラエティにかかわる意味を表す。これに言及するのは CCELD と CALD があげる例文である。いずれも前置詞 *in* に後続するものである。

new eyeshadows in a choice of 80 shade (CCED)*This hair colouring comes in several shades.* (CALD)

先に分析対象とした 200 例には、色彩に関する語義の総計が全体の 55% を占めていたが、これを第一に掲げる辞典は CCED のみであり、他の辞典で第一義に掲げるのは、日陰や物陰に関する語義である。先のセクションではこの語義を以下のように前置詞に後続し、しばしば定冠詞を伴うパターン C として分類した。

PREP (*the*) *shade*

このうち最も出現頻度が高いパターンはその 50% を占める *in the shade* (of~) である。これについてはどの辞典も何らかの形で言及している。定義文中の冒頭に掲げてそれを含む用例をあげる形式 (CCED)、コロケーションとして取り立てた上で例を占めず形式 (OALD、MED) そして用例に上げて太字で強調する形式 (OALD、CALD) に分かれる。

パターン A~C で *shade* の 68% 程度の出現パターンが尽くされる。残りは個々には 5% 以下の小数である。このうち、固定化したパターンで出現する例をみておこう。

a shade (パターン D) と *(all) shades of ~* はほとんどの辞典がそれぞれ独立した語義として扱う。後者にはその典型例 *all shades of opinion* のほか多少のバリエーションがあるが、CCED は定義文 ('The shades of something abstract are [...] ', 下線筆者) でこれに触れている。OALD と LDOCE は定義の前に掲げる SHORT CUT⁷ および SIGNPOST (次ページ参照) と用例で他の選択肢も示している。以下はそれぞれのラベル例である。

(all) shades of ~

of opinion/feeling	(OALD)
shade of meaning/opinion/feeling etc.	(LDOCE)

CALD だけは、これらを他とは異なった方法で扱う。先に示したように CALD は独特な語義提示法を用いており、名詞用法については〈SLIGHT DARKNESS〉と〈DEGREE〉の二つに大別して、その中で適宜語義を細分する。*a shade* および *(all) shades of ~* CALD はいずれも色彩に関する語義と共に〈DEGREE〉に納められている。以下は電子版 (web 版) を元に、一部割愛して示したものである。

shade noun (DEGREE)

- [C] a type or degree of a colour

Their kitchen is painted an unusual shade of yellow/an unusual yellow shade.

[...]

- [C] type or variation

They are hoping to satisfy all shades of public opinion.

There are several shades of meaning in that sentence.

a shade

slightly

Don't you think those trousers are a shade too tight?

shades of sth/sb INFORMAL

[...]

これにより、色彩に関する語義と *(all) shades of ~* で表される語義 (何かの「タイプ」) とが関連づけて示され、*a shade* については意味的に関連する固定句 (fixed phrases and idioms) として示

⁷ 小文字で表記されているが、ここでは文中で目立たせるために大文字で表記する。

される。一覧性に欠ける電子版（CD版、web版）では、上記のように *a shade* 等の句がリストの末尾に提示される。これらをそれぞれ独立した別の語義として扱う他の辞典ではこうした連想を示しにくい、CALD は語義間の関連や連想を効果的に示すことができると言えるだろう。

CALD における GUIDEWORD と同様のラベルは、5種の辞典のうち CCED 以外の辞典でも採用されている⁸。その名称は、GUIDEWORD (CALD)、SHORT CUT (OALD)、SIGNPOST (LDOCE) のようにそれぞれ異なっている。また、MED は定義が5つ以上の場合に見出し語のすぐ下に MENU を表示し、電子版では当該の語義にジャンプできるようにしているが、これもラベルに準ずる情報ととらえられるだろう。

見出し語あるいは語義によってラベルの付け方に多少の差はあるが、これが示す一種の文脈情報は CALD と同様に、ユーザーが求める語義と他との弁別に機能する。先にとりあげた *shade* の語義に付されたラベルを一覧表にしてみよう。

辞典 語義	OALD	CALD	LDOCE	MED
	SHORT CUT	GUIDEWORD	SIGNPOST	MENU
色彩・色調	OF COLOUR	DEGREE	COLOUR	form of a colour
物陰・日陰	OUT OF SUN	SLIGHT DARKNESS	OUT OF SUNLIGHT	where light does not go
<i>a shade</i>	SLIGHTLY	DEGREE	<i>a shade</i>	small amount/number
(<i>all shade of</i> ~	OF OPINION / FEELING	DEGREE	<i>a shade of</i> meaning/opinion/fee ling etc.	slightly different from
サングラス	FOR EYES	SLIGHT DARKNESS	<i>shades</i>	sunglasses

図1 EFL 辞典におけるラベル情報

網掛けの部分は、文脈情報ではなく語形や出現パターンを示したものを指す。

「物陰・日陰」に関しては、ほぼ同様の視点から情報付与されているが、「色彩・色調」については CALD だけが COLOUR に触れずに DEGREE を用いる。これは先に示したように、この辞典が COLOUR と DEGREE に基づいて見出しを分け、その内部で語義を細分化して示すためである。従って前者には「物陰・日陰」に加えて「サングラス」が、そして残りがすべて後者のもとに示される。*a shade* については、それぞれの情報が少しずつ異なり、OALD と MED はパラフレーズを示しているが、LDOCE は *a shade* というパターンそのものを提示する。これは (*all shade of*~ および常に複数形で用いられてそれが他の語義との弁別に働く「サングラス」でも同様である。*all shade of*~ および「サングラス」では MED がパラフレーズを示し、OALD は狭い意味での文脈情報を示しているといえる。

⁸ たとえば、OALD の short cut は関連する語義間で共用 (share) されることになっているが、*shade* に関しては別々の short cut が付与されている。

Sinclair (1991:109) はその冒頭で、コロケーション辞典の必要性を主張し、その執筆を進めていることに触れている。また Sinclair et al. (2004) にもそれをほのめかす記述が見られる (Moon 2008)。Sinclair の手によるものではないが、2003 年に *Oxford Collocations Dictionary for Students of English* の初版が、そして 2009 年には第 2 版が出版されている。そこでは名詞 *shade* は以下のように区分されて示されて、品詞ごとにコロケーション情報が提示されている。

1. area out of the sunlight
2. type of colour
3. (AmE) on a window

2 (type of colour) については、意味特徴の異なる形容詞のリストが 5 つのブロックに分けて示されている。前置詞とのコロケーションについては 1 (area out of the sunlight) については 5 種の、2 については 3 種のコロケーションと用例が示されている。こうした情報は、*shade* のようにパターンが意味の決め手になりやすいケースには特に有用である。

図 1 に示した語義のうち a *shade* および「サングラス」には言及していないが、*~ of meaning* および *~s of opinion* については、前者を前置詞とのコロケーションの用例に、後者を PHRASES としてあげ、両者に *figurative* と注をつけている。

5. おわりに

本稿では、意味の単位を従来より長めにとらえて多義語のコーパス分析を試み、その結果を辞典における扱いと比較することによって、辞典という物理的に限られた条件下で意味を扱う可能性を探究した。

ここで取り上げた名詞 *shade* においては出現パターンが意味の違いを示唆するもの (sense indicator) として有効に機能しており、長い単位を適用することの意義が確認された。結果の照合に用いた EFL 辞典においては、単語をキーとしながらも、それぞれが組織的手法 (organizational approach) を凝らしてコロケーションを中心とした出現パターンが示されていること、また SIGN POST 等のラベルを活用してユーザーを求める意味に誘導していることが考察された。程度の差こそあれ、全体に phraseology を重視して意味を扱う傾向を認めてよいであろう。

Moon (2008: 253) は、Sinclair が目指したコロケーション辞典に触れた上で以下のように述べている。

Perhaps this, above all, would have shown his vision of the interaction between phraseology, lexicography, and meaning, and gone some way towards establishing a new dictionary prototype, where orthographic words are no more than access points, and contexts are shown to predetermine meaning.

辞典は依然として単語をキーに編纂されるものではある。しかしながら、今回の考察範囲での EFL 辞典の記述に限っても、「単語がもはやアクセスポイントに過ぎない」という向きにあることが示唆されていたと言えるだろう。

今回は名詞一語を取り上げたにすぎなかったが、品詞等の特性が異なる語の分析を通して、さらに可能性を追究する必要があることは言うまでもない。

ところで、日本語の辞典にはこの EFL 辞典と同レベルのもの (counterpart) が、存在しないため、比較する対象を想定しにくい。それでもなお、より長い単位に注目して意味をとらえることで、EFL 辞典同様の革新が期待できるのではないだろうか。たとえば、現在刊行されている国語辞典のうち、『新明解国語辞典』(三省堂) のパラフレーズ型用例提示は、いち早くこれを実践したものだと考えられる。

また、日本語のコロケーション辞典には、姫野 (2004)、金田一 (2006) などがあるが、最近ではコーパス分析によって抽出されたコロケーション情報を辞書記述に応用する研究 (荻野 2009、田野村 2010 など) も見られる。国語研究所の大規模コーパス整備などによって、コロケーション辞典および一般の国語辞典の語義記述にさらなる改善や発展が期待できるであろう。

めざましいメディアの発達は、日本語母語話者が国語辞典を使用する場面や用途にも変化をもたらしつつある。主に未知語にあたる新語や時事用語と、既知語や今後の使用語彙候補となる項目とでは、求められる情報や参照される対象が異なるはずである。この前者はことばの受信面において特に必要とされるものであり、その性質はいわば open-choice principle に基づいて解釈されるものに相当する。一方、後者は phraseology に注目してとらえるべき対象であり、それゆえに特に発信面に注目して、その周囲の語との関係を含めた記述が求められるものではないだろうか。今後はこのような点も視野に入れて研究を進めたい。

参考文献

- Barnbrook, G. (2007) 'Sinclair on collocation', *International Journal of Corpus Linguistics* 12:2, 183-100.
- 南出康世 (2003) 「イディオモロジー (Idiomology) ・慣用原則 (Idiom Principle) ・基本 5 文型 (Five Basic Sentence Patterns)」『言語文化論叢』第 12 号、千葉大学、p. 31-40.
- Moon. R. (1998) *Fixed Expression and Idioms in English: a corpus-driven approach*. Oxford: Oxford University Press.
- (2008) 'Sinclair, Phraseology, and Lexicography', *International Journal of Lexicography* 21-3, p.243-254.
- 荻野綱男 (2009) 「コロケーション辞書」『国文学：解釈と鑑賞』第 74 号 (1)、至文堂 p.70-78.
- Sinclair, J. (1991) *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- (2004) *Trust the Text*, London: Routledge.
- Sinclair, J., Jones, S., and Daley,. (2004) . *English Collocation Studies: The OSTI Report*, edited by R. Krishnamurthy. London: Continuum. (Originally submitted 1970.)
- 田野村忠温 (2010) 「日本語コーパスとコロケーション — 辞典記述への応用の可能性」『言語研究』第 138 号、日本言語学会、p.1-23.

辞典類

- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. (2008, ed. 3). Cambridge: Cambridge University Press.
- Collins COBUILD Advanced Dictionary*. (2008, ed.6). Glasgow: Harper Collins.-Boston: Heinle and Cengage Learning.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. (2009, ed. 5). Harlow: Pearson Longman.
- Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*. (2007, ed. 2). Oxford: Macmillan Education.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*. (2010, ed. 8). Oxford: Oxford University Press.
- Oxford Collocations Dictionary for Students of English*. (2009, ed. 2). Oxford: Oxford University Press.
- 姫野昌子 (2004) 『日本語表現活用辞典』研究社
- 金田一秀穂 (2006) 『日本語コロケーション辞典』学習研究社